

津
端
亨
編
纂

現代短歌分類辭典

新裝判
24卷

現代短歌分類辞典

新装版24卷

通巻 1 8 2

平成四年七月五日発行

定価一六、〇〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 亨

発行所

現代短歌分類辞典刊行所

代表 津 端 亨

〒
345

埼玉県北葛飾郡杉戸町宮前一九六―五

電話(〇四八〇) 三八―〇〇四〇番

振替 東京三―九三二―四

(ISBN4-87706-182-7)

目次

目次	歌数	頁数	歌数	頁数	歌数	頁数
すでに〔既に〕	二〇四	一	すなあそび〔砂遊び〕	二	八	二
すてばち〔捨て鉢〕	一〇	四	すなあな〔砂穴〕	二	八	一
すてみ〔捨て身〕	二	四	すなあぶ〔沙浴〕	一	八	一
すてる〔捨てる〕	一六	四	すなあらし〔砂嵐〕	一	八	一
すてれお〔ステレオ〕	二	四	すなお〔素直〕	三三	八	一
すてんどぐらす〔ステンドグラス〕	八	四	すなおき〔素直き〕	四	六	五
すでにして〔既にして〕	一四	四	すなおなる〔素直なる・すなほなる〕	二六	七	三
すど〔簀戸〕	一	五	すなかぜ〔砂風〕	八	六	一
すどおし〔素通し〕	一	五	すながた〔砂型〕	一	六	一
すとおぶ〔ストープ〕	七	五	すなかに〔砂蟹〕	一	六	五
すどおり〔素通り〕	二	五	すなかべ〔砂壁〕	一	六	二
すつつく〔ストック〕	二	五	すながわ〔砂川〕	八	六	二
すつつく〔ストック〕	三	五	すなけむり〔砂煙〕	八	六	五
すつつぶ〔ストップ〕	二	五	すなこ〔砂子〕	三〇	九	一
すたらいき〔ストライキ〕	三	五	すなじ〔砂地〕	三五	九	一
すたらいく〔ストライク〕	一	五	すなぞこ〔砂底〕	二	六	二
すどり〔巣鳥〕	一	五	すなつく〔スナック〕	一	六	一
すとりいと〔ストリート〕	一	五	すなつぶ〔砂粒〕	七	六	二
すとりつぶ〔ストリップ〕	三	五	すなつぶ〔スナップ〕	二	六	三
すところお〔ストロー〕	六	五	すなとこ〔砂床〕	一	六	三
すな〔砂・すな〕	二二五	五	すなどり〔漁り〕	五	六	二
			すね〔脛〕	二五	三	二

すねもの〔拗ね者〕	六	二四	すふいんくす〔スフィンクス〕	二	一三〇	すべりひゆ〔滑りひゆ〕	八	一五
すねる〔拗ねる〕	二	二四	ずぶずぶ	二	一三〇	すべる〔滑る〕	二四	一五
ずのう〔頭脳・づのう〕	一七	二四	ずぶとい〔図太い・づぶとい〕	一	一三〇	すばおつ〔スポーツ〕	九	一五
すのこ〔簀の子〕	二二	二五	ずぶぬれ〔ずぶ濡れ〕	二〇	一三〇	すばつと〔スポット〕	一	一五
すのものの〔酢の物〕	三	二五	すぶり〔素振り〕	六	一三三	すばむ〔窄む〕	二	一五
すばあく〔スパーク〕	八	二五	ずぶり	一	一三三	すばめる〔窄める〕	二	一五
すばい〔スパイ〕	八	二五	すぷりんぐ〔スプリング〕	一	一三三	ずばん〔ズボン〕	四	一五
すばこ〔巣箱〕	三	二五	すべ	一	一三三	すばんした〔ズボン下〕	一	一五
すばずば	三	二五	すべいん〔スペイン〕	九	一三三	すま〔須磨〕	三	一五
すはだ〔素肌・素膚〕	四	二六	すぺえす〔スペース〕	一	一三三	すまあと〔スマート〕	一	一五
すはだか〔素裸〕	二六	二七	すべからく〔須く・応く〕	三	一三三	すまい〔住居〕	七	一五
すはだし〔素跣・素裸足〕	四	二六	すべすべ	二	一三三	すまいる〔スマイル〕	一	一五
すはま〔州浜・洲浜〕	六	二六	すべすべと	一	一三三	すまさん〔須磨山〕	二	一五
すばらしい〔素晴らしい〕	一〇	二六	すべて〔全て・凡て・総て〕	五	一三三	すまし〔澄まし・清まし〕	一〇	一五
すばらしく〔素晴らしく〕	五	二六	すべない〔術無い〕	一	一四〇	すましじる〔すまし汁〕	二	一五
すばらしさ〔素晴らしさ〕	四	二六	すべなし〔術無し〕	一七	一四〇	すます〔済ます・済ます〕	一六	一五
すばり	三	二六	すべもが	一	一四〇	すます〔澄ます・清ます〕	三	一五
すばり	一〇	二六	すべもすべなさ	一	一四〇	すまでら〔須磨寺〕	二	一五
すばる〔昂・スバル〕	一三	二六	すべもすべなし	八	一四〇	すまとら〔スマトラ〕	六	一五
すびいち〔スピーチ〕	三	二六	すべらす〔滑らす〕	六	一四〇	すまない〔済まない・済まない〕	一	一五
すびいど〔スピード〕	九	二六	すべり〔滑り〕	一七	一四〇	すまのうら〔須磨の浦〕	二	一五
すびつ〔炭櫃〕	四	二三	すべりこみ〔滑り込み〕	一	一五	すみ〔炭〕	一七	一五
すつびつ〔スピッツ〕	二	二三	すべりこむ〔滑り込む〕	一	一五	すみ〔墨〕	二七	一五
ずひょう〔図表・づへう〕	二	二三	すべりだい〔滑べり台〕	一	一五	すみ〔酸味〕	五	一五

すみ〔桧〕	四	一七五	すみがわ〔隅田川〕	六	一八〇	すみよしのまつ〔住吉の松〕	五	一八
すみあと〔墨跡〕	一	一七五	すみだこうえん〔隅田公園〕	六	一八三	すみれ〔菫〕	三八	一八
すみいろ〔墨色〕	三	一七五	すみだわら〔炭俵〕	六	一八三	すみれいろ〔菫色〕	二	一九五
すみうし〔住み憂し〕	二	一七六	すみつぎ〔墨継〕	一	一八三	すみれさいしん〔菫細辛〕	二	一九五
すみうり〔炭うり〕	一	一七六	すみつく〔住み着く〕	五	一八三	すみわたる〔澄み渡る・澄みわた〕	六	一九五
すみえ〔墨絵・墨繪〕	七	一七六	すみっこ〔隅っこ〕	一	一八三	すむ〔住む〕	一〇〇	一九七
すみか〔住み処〕	三	一七六	すみどころ〔住み所〕	三	一八三	すむ〔済む・済む〕	二	二〇〇
すみかき〔墨書き〕	一	一七七	すみとり〔炭取り〕	一	一八三	すむ〔澄む〕	五九	二〇三
すみがま〔炭窯〕	六	一七七	すみなす〔住み成す〕	一	一八三	すめかみ〔皇神〕	一六	二〇三
すみかわる〔住み替わる〕	一	一七七	すみなる〔すみなる〕	一	一八三	すめぐに〔皇国〕	一	二〇四
すみぎ〔炭木〕	三	一七八	すみのぼる〔澄み昇る〕	二	一八三	すめみこ〔皇御子〕	一	二〇四
すみきる〔澄み切る〕	一	一七八	すみばこ〔炭箱〕	二	一八三	すめまのかみ〔天孫の神〕	一	二〇四
すみこみ〔住み込み〕	一	一七八	すみび〔炭火〕	七	一八三	すめらぎ〔天皇〕	五	二〇四
すみから〔炭殻〕	一	一七八	すみびつ〔炭櫃〕	三	一八五	すめらみいくさ〔皇御軍〕	五	二〇五
すみごや〔炭小屋〕	一	一七八	すみぶと〔墨太〕	二	一八五	すめらみくに〔皇御国〕	五	二〇五
すみずみ〔隅隅〕	六	一七八	すみぼうし〔角帽子〕	一	一八五	すめーり〔澄めり〕	二	二〇六
すみすり〔墨磨り〕	八	一七八	すみません〔済みません〕	一	一八五	すめーる〔澄める〕	九	二〇六
すみそ〔酢味噌〕	四	一七八	すみや〔炭屋〕	二	一八五	すめーる〔住める〕	一八	二〇六
すみぞめ〔墨染め〕	四	一七八	すみやかに〔速やかに〕	五	一八五	すめるつき・すむつき〔澄める月・澄む月〕	四	二〇四
すみぞめいろ〔墨染色〕	一	一七九	すみやかさ〔速やかさ〕	六	一八七	すめろぎ〔天皇〕	六	二〇四
すみぞめの〔墨染乃〕	二	一七九	すみやき〔炭焼き〕	二	一八七	すめん〔素面〕	二	二〇四
すみぞめのころも〔墨染の衣〕	三	一七九	すみやきごや〔炭焼き小屋・炭焼小舎〕	四	一八七	ずめん〔図面〕	二	二〇四
すみぞめのそで〔墨染の袖〕	一	一七九	すみよし〔住吉〕	五	一八七	ずーも〔ずも〕	二	二〇四
すみだ〔隅田〕	三	一七九	すみよしおどり〔住吉踊り〕	二	一八八	すもう〔相撲・角力〕	六	二〇四

すもうとり〔相撲取り〕	二	二四	すらーむ	三五	二七五	する〔剃る〕	一八	三〇九
すもうとりぐさ〔相撲取草〕	四	二四四	すらも〔すらも〕	二五	二七九	する〔刷る〕	四	三〇九
すもつぐ〔スモッグ〕	二六	二四四	すらり〔すらり〕	二	二六二	する〔摺る〕	九	三〇九
すもと〔洲本〕	二	二四四	ずらり〔ずらり〕	四	二六二	する〔擦る〕	二七	三〇〇
すもととりぐさ〔すもとり草〕	一	二四四	すらりと〔すらりと〕	八	二六二	する〔磨る〕	三	三〇〇
すもも〔酢桃・季〕	九	二四四	ずらりと〔ずらりと〕	六	二六二	するが〔駿河〕	五	三〇一
すもりとり〔巢守り鳥〕	一	二四七	ずりおちる〔ずり落ちる〕	一	二六三	するがじ〔駿河路〕	三	三〇二
ずや〔すや〕	七六	二四七	すりがらす〔磨りガラス〕	二	二六三	するがだい〔駿河台〕	二	三〇二
すやき〔素焼き〕	四	二四四	すりきり〔擦り切り〕	一	二六三	するがなだ〔駿河灘〕	一	三〇三
すやすや〔すやすや〕	三〇	二六四	すりこみ〔摩り込み・摺り込み〕	一	二六三	するがのうみ〔駿河の海〕	三	三〇三
すやま〔巢山〕	九	二六五	すりこむ〔摩り込む〕	一	二六三	するがのくに〔駿河の国〕	九	三〇三
すゆ〔据ゆ〕	一	二六五	すりつける〔擦り付ける〕	七	二六三	するがらん〔駿河蘭・建蘭〕	二	三〇四
すゆ〔鯉ゆ〕	二〇	二六五	すりっぱ〔スリッパ〕	一五	二六三	するがわん〔駿河湾〕	七	三〇四
すら〔すら〕	三三	二六六	すりつぶ〔スリッパ〕	三	二六四	ずるきやつ〔狡き奴〕	一	三〇四
すらいど〔スライド〕	四	二七三	すりつぶしーつつ	一	二六四	ずるく〔狡く〕	一	三〇四
すらく〔すらく〕	一	二七三	すりつぶす〔磨り潰す〕	二	二六四	するすみ〔磨墨〕	二	三〇四
すらしー〔すらし〕	二	二七三	すりて	一	二六四	するする〔するする〕	二九	三〇四
すーらしーも〔すらしも〕	一	二七三	すりぬける〔擦り抜ける〕	一	二六四	ずるずる〔ずるずる〕	三	三〇五
ずらす〔ずらす〕	三	二七三	すりばち〔搗り鉢〕	一	二六四	ずるちん〔ズルチン〕	一	三〇五
すらすら〔すらすら〕	一五	二七三	すりへらす〔磨り減らす〕	四	二六四	するっと〔するっと〕	一	三〇五
すらだに〔すらだに〕	二五	二七四	すりむく〔擦り剥く〕	一	二六四	するどい〔鋭い〕	五	三〇五
すらつくす〔スラックス〕	二	二七四	すりよる〔擦り寄る〕	一	二六四	するどき〔鋭き〕	九	三〇五
すらに	二七	二七四	すりる〔スリル〕	三	二六四	するどく〔鋭く〕	二	三〇五
すらばや〔スラバヤ〕	一八	二七五	する〔する〕	一〇五	二六四	するどさ〔鋭さ〕	五	三〇六

するどし〔鋭し〕	二五	三七	すわや〔すわや〕	六	三三	ずんば〔ずんば〕	四	三七四
するどに〔鋭に〕	一	三九	すわってーいる〔坐っている〕	一	三二	すんぴよう〔寸秒〕	四	三七四
するめ〔錫〕	二	三九	すわり〔座り・坐り〕	九〇	三三	すんぷ〔駿府〕	四	三七四
するーらし〔するらし〕	一	三〇	すわりこみ〔座り込み〕	六	三三	すんぶん〔寸分〕	一	三七五
するり〔するり〕	五	三〇	すわりーて〔座りて〕	六	三三	すんぼう〔寸法〕	二	三七五
ずれ〔ずれ〕	五	三〇	すわりをるーべし〔坐りをるべし〕	一	三三	すんよ〔寸余〕	四	三七五
すれあう〔擦れ合う〕	二	三〇	すわる〔座る・坐る〕	四〇六	三三	せ〔瀬〕	二二九	三七五
すれすれ〔擦れ擦れ〕	二二	三〇	すわる〔据わる〕	二二	三三	ぜ〔是〕	三	四〇二
すれちがい〔擦れ違い〕	二二	三三	すわれーる〔坐れる〕	四	三三	ぜあみ〔世阿彌・世阿弥〕	二〇	四〇二
すれーど〔すれど〕	三	三三	すわん〔スワン〕	二	三三	せい〔生〕	二	四〇三
すれーども〔すれども〕	一	三四	すんか〔寸暇〕	四	三三	せい〔背・脊〕	元	四〇三
すれーば〔すれば〕	五五	三四	すんげき〔寸隙〕	一	三三	せい〔姓〕	七	四〇四
すれる〔擦れる・摩れる・磨れる〕	六	三六	すんごう〔寸毫〕	一	三三	せい〔聖〕	一	四〇四
すろうぶ〔スローブ〕	九	三六	すんじ〔寸時〕	一	三三	せい〔精〕	二四	四〇四
すわ〔諏訪〕	一四	三六	すんしゃく〔寸尺〕	二	三三	せい〔所為〕	二	四〇五
すわ〔すわ〕	二	三九	すんすん〔すんすん〕	三	三三	ぜい〔贅〕	六	四〇五
すわえ〔楚杪・すわえ〕	二二	四〇	ずんずん〔ずんずん〕	六	三三	せい〔性〕	二七六	四〇五
すわこ〔諏訪湖〕	五	四〇	すんぜん〔寸前〕	九	三三	せいあい〔性愛〕	二	四〇一
すわこそ〔すわこそ〕	二	四〇	すんだん〔寸断〕	二	三三	せいあく〔性悪〕	一	四〇一
すわたいしゃ〔諏訪大神〕	一	四〇	すんてつ〔寸鉄・寸鐵〕	一	三三	せいあん〔西安〕	四	四〇一
すわのうみ〔諏訪の海〕	四	四〇	すんど〔寸土〕	九	三三	せいあんじ〔静安寺〕	一	四〇二
すわぶき〔咳・すわぶき〕	二二	四一	すんど〔寸胴〕	一	三三	せいい〔勢威〕	一	四〇二
すわぶく〔咳く・すわぶく〕	二四	四二	ずんど〔ずんど・づんど〕	三	三三	せいい〔誠意〕	三	四〇二
すわみようじん〔諏訪明神〕	一	四三	すんなり〔すんなり〕	六	三三	せいいき〔西域〕	四	四〇二

せいたいししょうぐん〔征夷大將軍〕	四二	四二	せいが〔聖駕〕	一	四二	せいがん〔静観〕	一	四四
せいいつ〔精一〕	三	四二	せいが〔静臥〕	三	四二	せいがん〔正眼〕	三	四四
せいいつぱい〔精一杯〕	六	四二	せいかい〔政界〕	四	四三	せいがん〔西岸〕	一	四四
せいう〔晴雨〕	六	四二	せいかい〔盛會・盛会〕	三	四三	せいがん〔請願〕	一	四四
せいうん〔青雲〕	二〇	四三	せいかい〔青海〕	一五	四三	ぜいがん〔税関〕	八	四四
せいうん〔星雲〕	六	四七	せいかかく〔生化学〕	一	四四	せいかんじ〔清閑寺〕	一	四四
せいえい〔精鋭〕	三	四七	せいかきゅうたく〔生家旧宅〕	一	四四	せいがんとし〔青岸渡寺〕	二	四四
せいえき〔精液〕	二	四七	せいかく〔正確〕	四	四四	せいかんな〔精悍な〕	五	四四
せいえん〔声援〕	一	四七	せいかく〔性格〕	九	四五	せいかんれんらくせん〔青函連絡船〕	一	四四
せいえん〔凄艶〕	五	四七	せいがく〔聲樂・声樂〕	一	四六	せいき〔世紀〕	六	四四
せいえん〔製塩〕	三	四八	せいかくてき〔性格的〕	一	四六	せいき〔正規〕	三	四四
せいおう〔西欧〕	八	四八	せいかくに〔正確に〕	八	四七	せいき〔生氣〕	一四	四四
せいおう〔聖王〕	一	四八	せいかたい〔聖歌隊〕	一	四七	せいき〔西紀〕	一	四四
せいおうじ〔聖王寺〕	一	四八	せいかだい〔聖火台〕	一	四七	せいき〔性器〕	二	四四
せいおん〔聲音・声音〕	三	四八	せいかつ〔生活〕	七	四七	せいき〔青旗〕	二	四四
せいか〔正貨〕	一	四九	せいかつく〔生活苦〕	二	四四	せいき〔清輝〕	一	四四
せいか〔生花〕	七	四九	せいかつけん〔生活権〕	一	四四	せいき〔盛期〕	三	四四
せいか〔生家〕	三	四九	せいかつけん〔生活圏〕	一	四四	せいき〔精氣・精氣〕	四	四四
せいか〔成果〕	三	四〇	せいかつひ〔生活費〕	八	四四	せいぎ〔正義〕	一九	四四
せいか〔聲價・声価〕	一	四〇	せいかつりよく〔生活力〕	六	四四	せいぎ〔盛儀〕	四	四四
せいか〔聖火〕	九	四〇	せいかぶつ〔青果物〕	一	四四	せいきゅう〔性急〕	五	四四
せいか〔聖歌〕	二	四〇	せいかん〔生還〕	一〇	四四	せいきゅうしょ〔請求書〕	一	四五
せいか〔製菓〕	二	四〇	せいかん〔清閑〕	一	四五	せいきよ〔逝去〕	三	四五
せいが〔青蛾〕	一	四〇	せいかん〔精悍〕	五	四五	せいぎよ〔生魚〕	五	四五

せいぎょ〔成魚〕	一四〇	せいご〔成語〕	一四〇	せいさん〔生産〕	一八四
せいぎょ〔制御〕	一四〇	せいこう〔成功〕	二四〇	せいさん〔精算〕	一四〇
せいきょう〔聖教〕	二四〇	せいこう〔性交〕	一四〇	せいさん〔凄惨〕	五四〇
せいぎよう〔生業〕	五四〇	せいこう〔清香〕	一四〇	せいさん〔清算〕	一四〇
せいきよういく〔性教育〕	一四五	せいこう〔精巧〕	一四〇	せいざん〔青山〕	三三〇
せいきよく〔政局〕	二四五	せいこう〔精好〕	一四〇		
せいきん〔青衿・青襟〕	三四〇	せいこうとうとく〔晴耕雨読〕	一四〇		
ぜいきん〔税金〕	二四五	せいこうじよ〔製鋼所〕	二四〇		
せいく〔聖句〕	五四〇	せいこうてい〔清光亭〕	一四〇		
せいくらべ〔背比べ〕	一四五	せいこん〔成婚〕	一四〇		
せいけい〔生計〕	三四〇	せいこん〔精魂〕	五四〇		
せいけい〔整形〕	一四〇	せいこん〔精根〕	九四〇		
せいけつ〔清潔〕	二四五	せいざ〔正座〕	四四〇		
せいけつさ〔清潔さ〕	二四五	せいざ〔星座〕	五四〇		
せいけつな〔清潔な〕	六四五	せいざ〔静座〕	三四〇		
せいけん〔生絹〕	六四五	せいさい〔制裁〕	一四〇		
せいけん〔政見〕	三四〇	せいさい〔聖祭〕	一四〇		
せいけん〔政權・政権〕	九四五	せいざい〔製材〕	二四〇		
せいけん〔聖賢〕	五四〇	せいざいき〔製材機〕	二四〇		
せいげん〔制限〕	八四五	せいさく〔制作〕	六四〇		
せいげん〔誓言〕	五四〇	せいさく〔政策〕	七四〇		
せいこ〔西湖〕	三四〇	せいさく〔製作〕	一四〇		
せいご〔生後〕	一四五	せいさくしよ〔製作所〕	一四〇		
せいご〔正誤〕	一四五	せいさくじよう〔製作場〕	一四〇		

気圧圈すでに過ぎたり大洋のま上の我が機いよよろしも（支那事変戦地）	石崎 春一
気圧さるるごと織機騒音の中に佇ちすであはれの歌ごゑもなし④	小宮 良太郎
黄色なる煙をはける工場見ゆ短日すでに三時すぎをり②	鹿兒島 壽藏
議員たちの自動車そろひて既に久し尻への口にとぐろまける群集①	岡山 巖
記憶にぶきわれにもすでに忘れざるナホトカといふ固有名詞ひとつ④	安田 青風
機械の響すでに高まるこの地区にあかあかと映え朝焼の雲は③	木俣 修
飢餓といふことにもすでに思至る日ありて街の子らに眼をそむく③	栗原 潔子
気兼ねなどなくなりてものが言ひ易し老ゆればすでに人は咎めず⑫	松村 英一
木木の紅葉すでに散りつくしいちめんに静りふかし山の上の雨①	小泉 琴三
樹々の下を歩めば匂ひかんばしきこの樅らすでに百年を越す（舊地）	朝吹 磯子
木々の芽のすでに萌えたる森のなか緑にかすむ感覚にほふ⑥	松岡 貞絵
木々の芽はまだ萌えなくに野茨のふしふしすでに芽をふきてをおり	岡本 大無
○	
桔梗はすでにあらなくやなぎらん群る高どに立ちにけるかな③	井出 一太郎
本草より人の心に至るまで憐むことのすでに終りし⑫（心の遺棄）	與謝野 晶子
菊の園すでにすがれてさびしきにかたへを通る人ら見もせず⑦	岡野 直七郎
象谷を下りしむかし七たりの二人はすでに今あらぬなり①	大村 呉樓
ささらぎとなりし一日の○君等囚はれにけり君既にいへりき①	南原 繁
岸のへに すでにとり佩く横刀がもと 赤櫟の詐刀 真身なしに あ	土岐 善麿
はれ⑫	
汽車すでにふるさとに入る裏山の松の木遠く見えそめにけり（朝霧）	奥貫 信盈
汽車の行きすでに山路を登りぬし雪野の原は月に白けつ（新萬葉集五）	鶴見 康明
機銃すでに焰のごとしいまはただおのれ焼くるまでと撃ちに撃ちけむ	佐藤 淳一郎

黄水仙の花まだひらかずとなりには既に咲盛るちうりつぷの花⑥	尾山 篤二郎
傷きて山に臥しつづ刻経れば既に昏みて時雨降り来ぬ（支那事変戦地）	菰渚 正雄
北沢の沢の小川のわかれ霜すすきは枯れてすでに残らず⑧	尾山 篤二郎
北支那にはてたる君を思ふにも祈りに似つつすでにひそけし②	堀内 通孝
北千住のプラツトホームひろびろと吹きとほす風のすでに秋づく①	吉田 正俊
北窓のあかりは既に青みたれど今日も朝から子は居らぬかも	前川 佐美雄
北屋根にはりつく雪を見下してすでに日暮れてゐる低地帯	井上 健太郎
来て見れば、おもかげすでに変り果ててともかへらぬひととなりぬ	杉浦 翠子
②	
黄と白の蝶ふたつゐて高低のはげしき飛翔すでに幾とき①	芦田 高子
昨日の我すでに失せては今日の我新しき生を自が手もて生く③	大岡 博
木の梢を吹きぬけてくる朝風がすでに秋なるおどろきをする	西村 陽吉
木下道すでにかけりて蜩の声あわただし独り歩むに①	土田 耕平
黄の花のすでに乏しき西瓜畑そこに俵をゆかせし君はも①	大熊 長次郎
昨日のあさいでし玄関を一日経て入りゆくに既にいのちなきひと	森岡 貞香
きのふまで思ひしはすこやかな母なりきすでに意識なく言交はし得ず	横田 専一
③	
きのふわれの会ひたる人は今朝すでにソウルに飛びて会談をせり⑥	岡野 直七郎
騎馬一騎馳け抜けてすではるかなり師団道路は広くはろけし（新万葉集三）	菊川 広
機はすでに海の上をゆけり波がしら白うたつ見ゆとほく真下に②	栗原 潔子
機はすでに水を離れて一碧の青田の上をたかく飛びをり①	藤原 東川
騎馬武者の馬ものうげに鼻鳴らし祭の列もすでに倦みけむ⑫	吉井 勇
木原山夕べの霞は松の間に冷えとどこほりすでに月あり②	白井 大翼

きびしきを乗りこえむ心すでにして高きに向ふむしろきびしく③	小宮良太郎
きびしく町はうつろふ過ぎゆけば大事件さへ人すでに言はず （書あら	谷鼎
し	
黍の穂のすでに出でたる野は暑く残兵を追ふ砲のとどろく③	柴村貢
黍稗のたふれ合ひあふ川原畑にすでにあふるばかり露置く④	生方たつゑ
きほひ心もちて仕事にはげみしは既に過去にて夢のごとしも①	関得一郎
気まぐれに誘ひし人が時たがはず来たれる故にすでに憎めり	伊藤喜代子
君が詩のすでに禪より熟せるを喜ぶとうたひし 五山の僧あり②③	土岐善麿
君が死を悼みむかへば思ほゆる佐々木君松本君も既に世に亡し⑩	松村英一
君が戦死二年近く知れずしてたちまちすでにけふ大祥忌④ （角川文庫	吉野秀雄
君がをしへ受けつるものも幾人か既に身まかり時ゆかむとす⑩	斎藤茂吉
君死にすでに十七年おもふこと世は常ならず人も変りぬ⑪	松村英一
君既にいづくにかある六道の非想非非天のあたりか④ （角川文庫	吉野秀雄
君すでに帰りたらむか初蚊帳にあふぐ戸外は今宵月あり④	奥貫信盈
君すでに地にいましつ神の世のおごそかなるを見給へるかな①	近江満子
君の妻こよひ峠とききしより夜更けておもふすでにしばしば②	平野宣紀
君ましし世は古りにけりみ弟子たち左千夫節もすでに亡き人①	岡本大無
客あらぬ元日の午すでに過ぎそぞろもとほる竹藪のほとり③	植松寿樹
仰々しく農村救済ををらびさけべ農民たちはすでにたのまじ①	美禰国樹
京極にひしめく人の波みれば京都はすでによみがへるらし （みちのくあけく	岡本文弥
れ	
気やすめに強壯剤をのみそめて村のあけくれすでに久しき①	富岡冬野
キヤタビラの土のくぼみへふきたまりすでに光れば花さへにくき	山田あき
宮城にぬかづく国民すでに多くこぞり立ちたる心ぞ清明き⑥	吉植庄亮

急性肺炎の熱すでに分離せりといふ妹の呼吸も整へり今は （朝日短歌二	小堀雅子
旧びとと久しき会ひを歎びしきぞの今宵はすでに更けたり⑩	釈迢空
級友の早きは既に五十年忌迎ふるまでに生きし君とわれ⑤	植松寿樹
急をつぐる島のひとつを言ふ夜々の星のひかりもすでに秋なり	木俣修
窮極は既に定り （きま をり余生をばいそしみ勤め悔なからしめむ⑨	尾山篤二郎
旧正の三日の昼に生れきと教へし姉はすでに世に亡し⑨	岡野直七郎
牛乳の空壇出しに行きし妻すでに霜ふる外の夜を言ふ⑤	高安国世
胡瓜や南瓜を食ひて見る生活。すでにくつわむしの如くすがしくなる。	矢代東村
⑤	
胸郭の手術もすでにかなはじと知りてよりのち漂白ふごとし①	久保井信夫
凶作をつたへられ居りすでにして秋風到る石狩の野辺①	井出一太郎
共産主義専制下の全地球をすでにありありとおもふ時あり②	柴生田稔
峡路に陽のたけゆきて掛稻のさらさら鳴るはすでに乾けり （新萬葉集五	高橋啓枝
今日すでに四十日を過ぎつ大空を仰がず海の蒼波を見ず⑩ （山と水と	佐佐木信綱
京の灯はすでに春やとおもひつつ提げて下り立つ旅艱かも	吉井勇
峡の山すでに陰たつときを来てしらじら寂し岩激つ水 （新萬葉集九	吉田元治
京橋の辻に紙屑など舞ひたてすでに木枯めく風あらぶ①	野村清
今日みればあざみはすでに穂に立ちぬ言にいふべき悔にあらねど①	太田青丘
去年より訪はねばならぬ友を思ひすでに二月も終るなり今日②	武井ひろ子
京橋の辻に紙屑など舞ひたてすでに木枯めく風あらぶ①	野村清
今日まで忍びは来つれうつそみのわが堪へちから既に弱れり （萬	佐佐木信綱
郷村の鎮守社の庭に歌碑建てよと言はれて已に数年を過ぐ⑭	原三郎
清くただ清くありたしと既に反動に似し考へか①	小暮政次
清く瘦せて尖る顚頂よ真向へば先生は生きてすでに仏なり④	高橋希人

来り逢ひてこの歌碑の前に写真とる慣ひもすでに久しくなりぬ④	長谷川 銀作
切石のトーチカ陣地並べども敵兵すでに退きてなし（支那事変戦地）	馬場 五郎
伐り株に噴く松脂の光りつつ山は日ざしのすでに春めく⑥	若林 牧春
霧霜のすでに降りゐて渡り鳥わたらむ木曾路紅葉しめたり①	立花 馨
霧すでに杉ある方にかたまりて月高く澄む神籬の庭⑧	太田 水穂
霧積の泡盛草のおもかげの見ゆれとすでにうら枯れぬらん②③	與謝野 晶子
霧ながら稲の穂花のけふるなり朝の陽かげの既に暑きに	菊池 知勇
霧に入り霧をぬけすでに幾時をのぼり来てここに麻畑あり④	小宮 良太郎
きりぬきのすでに黄ばめるいくたばをしひてみづから焼くにしのびず	土岐 善麿
②⑧	
霧晴れて既に朝光させる街空電車あかるくゆれゆれ通るも	宇都野 研
霧ふかく雨となりつつこの山にすでに三夜さの時たちにけり	柴生田 稔
議論の末よるべき彼に政治ありすでに壁の如き心に対ふ③（角川文庫）	近藤 芳美
木を隔て先づ水を聴く既にして細き橋見ゆ池の亭見ゆ⑬	與謝野 寛
銀河濃くながる下にわが半生すでに過ぎたりいまだ娶らず（毎日歌壇）	久羽 博史
緊張したまた呆然とせし四日間すでに戦争の終結を告ぐ①	松井 如流
金箔もすでにさびたる山染が襖絵の巨樹汐風を浴ぶ①（新潮）	岡崎 義恵
杭打機の連続したる響きありてこの朝すでに霧だたむとす	前田 夕暮
悔ゆるともすでに帰らぬ母なりき泪のなかに掌は合はさるる②	市山 盛雄
九月すでにみ雪とぞなる高山のそのいただきに咲ける花かも⑥	窪田 空穂
九月すでに秋冷を起ゆる冷たさと朝侘びしめば妻の否める②②	窪田 空穂
草合歡はすでにねむれり夕ぐれの岡のへ来れば空のあかるさ②（現代短歌全集・現代短歌大系）	土田 耕平
草津すでに夜寒なりけり湯畑のけむりの温さなつかしくして⑤	吉野 秀雄

草合歡はすでにねむれり夕ぐれの岡のへ来れば空のあかるさ	土田 耕平
草の色すでに衰ふる野の家に薬を煮つつ一人ありけむ④	島木 赤彦
草のなか手を取り合ひて行く見れば吾が世はすでに過ぎし思ほゆ	狩野 登美次
草の葉の光るを見ればくさむらに夜露はすでに下りにけるかも②	杉浦 翠子
草の葉はすでに露置けり妹どちに送られて帰るこの村の道①	中村 美穂
草叢に流るる水が光りつつ朝すでにして暑き日の照り（多磨二）	上崎 修一
叢はすでに枯いろ目立ちつつ一本のアカシヤの葉ばかりが青し①	堀内 通孝
草むらはすでに衰ふる草のあり秋日差あつき濠端の路④	堀内 通孝
草も無き荒海の磯はとどろきてすでに間近きみ冬の光⑨	尾山 篤二郎
崩れたる石垣の間に生ひし草すでにみのりて雨にかたむく	横井 邦子
崩れをはり既に為む術なかりしも人目を包みなり経けり君⑬	窪田 空穂
くだり来て比叡を仰げばわが息のすでに凝るがにただよへる雲⑬	吉井 勇
くちなしは交配すでに成りしかば花卉の先よりくさりいそげり	成田 祐吉
口の中に氷くづるる音をきくすでに君とあることもものうく①	富小路 楨子
口髭のうつらぬ写真あやしめどわが髭はすでに白くなりしなり④（角川文庫）	吉野 秀雄
口ひげの延びたまひたるおもかげも吾より若くすでになります⑪	斎藤 茂吉
くつわ虫の声すでにあらぬ高原に雲微塵なき月照りわたる②	谷 鼎
国生みの戦はすでに南洋に印度に民族を光り萌えしむ⑥	吉植 庄亮
国すでに亡びしものを金閣の焼かれしを何ぞ惜しといはむや③	岡本 大無
国賭せる戦のあとか既にして麦青む曠野雁渡るなり（支那事変戦地）	上 稻吉
国のため二十数名の店員を既に出征しめて今日君は征つ（支那事変戦後）	久能 放羊
国の南に春すでにしていたれるを惜しみつつ又今日は北する③	小宮 良太郎
櫟林の下に狭きまで茂り咲きしあまどころもすでに盛りを過ぎつ②	斎藤 喜博

くひこみし入江ひそけき水の面に朝焼くるいろ既におとろふ④ 高橋 希人
 食む飯に腹充ち足りて在りし日を既に思はず国はたたかふ⑥ 半田 良平
 曇り影すでに深けば日まはりの大輪の花は傾きにけり② 中村 憲吉
 くもりなきふたつのまなこにたまひたるわがたらちねはすでにいまま
 ず③ 会 津 八一
 暗がりに脚絆巻きつつ、あわただし、高射砲はすでに唸りはじめぬ 渡 辺 順三
 暗きあめ谷にこしかばすでにして夥し朴のしめれる落葉(暗葉) 石 野 勝美
 くらくなりし衢のうへに月照らす灯いましむるすでに七日か①① 斎 藤 茂吉
 グランドも片側は既にかがり来ぬいま八回に入るところなり① 大悟法 利雄
 庫裏出でてあしたもとほる寺山にすでにし誰ぞ透る歌声 合 田 艶子
 栗木垣をもれ来る朝日きらめきてすでに暑さのきざしを示す 村 野 次郎
 栗の花こぼれてすでに黒ずみぬ梅雨あけの雷もひびくことなく(松籟) 谷 鼎
 苦力らの話に同情するわれの既に幾度も金借りられぬ② 相 良 義重
 グリルの隅に子等とひそけくパン喰みし桑港の正月よすでに杳けし④ 朝 吹 磯子
 苦しみつつ机の前にひと夜経しわれを呼ぶ幼子はすでに眼ざめて⑥ 木 俣 修
 車前草はすでにさびいろに色づきて晩夏の光いだきまでにさす② 中 野 菊夫
 くれぐれの林のはてに落つる日の憂鬱は既に常凡ならず② 高 橋 希人
 くれなゐにほふ蓮はすでになし池埋めておほかたは汚なき田貧しき 堀 内 通孝
 畑④ 土 岐 善麿
 くれなゐの朝露ながらすするべきトマトはすでに実となりけり⑧ 依 田 秋圃
 くれなゐは既にも見えずゆふ闇にほのかに残るつつじ白花 辻 本 敬三
 昏れ残るひと木の合歡の花あかり木星はすでに光放ちぬ(多磨三) 河 杉 初子
 くれ早くすでに小暗き川の面になづさふ霧を見かへりにけり③ 若 林 牧春
 黒揚羽ひとつ舞ひゐて寺庭は青葉の光りすでに夏寂ぶ⑧

くろぐろと蟻行進のさまを見て徐州戦は既に近しとおもふ①① 斎 藤 茂吉
 黒煙つつむ街角を撮したり白色の屋根とすでにうつろなる窓② 山 本 友一
 桑摘みてあくに汚れし手を洗ふ門川は既に小暗かりけり(新万葉集四) 斎 藤 伸
 花頭窓開けありてすでに寒からず芭蕉玉巻き枇杷芽ふく見ゆ④(角川文庫) 吉 野 秀雄

鉾をもて導くままにゆく水がすでにためらはぬ勢もてり(白鷺)

軍艦島前方に見え波の下はすでに杭道網目なすといふ②

群衆を離れささやく幾人か女子學生は既に興奮す④

軍神のみ靈かへらず桜花すでに散りたる空の眼にはきびしき④

軍刀などすでに用意してあるといふこの友の眉宇にあらはれる決意の

いろ⑤

軍馬運ぶ貨車眼の前を光り過ぎ既に一角には戦火あがれり②(現代短歌大系)

軍力などすでに用意してあるといふこの友の眉宇にあらはれる決意の

いろ

警官につかみかかれる蓬髪の写真もすでにあきあきとしつ(村野四郎)

刑期すでに半となりぬ網走の川を流るる氷魂を見て

溪谷の俯瞰をただにたのしめばすでに霧飛びて檀赤き山(新万葉集二)

芸術はすでにたふとしうつくしき人の孤独はいよまたふとし①

啓蟄もすでに過ぎたるこの頃を愛宕嶺にいまに残る雪あり③

鶏頭はすでにあざれて地の上に黒く小さき実をこぼしけり③

警報はこの幾日か出でをりて浜の湯宿はすでに戸ざせり②

恵林寺の島の岩組蘇苔ふかく荷葉はすでに時過ぎにけり⑩

今日買ひしくづ箆一つ台所の片隅にすでに位置を占めたり②

真鍋 美恵子
 中河 幹子
 小暮 政次
 朝吹 磯子
 矢代 東村
 森山 汀川
 矢代 東村
 木俣 修
 井上 草城
 飯田 莫哀
 岡 稻里
 中沢 庭柯
 中沢 庭柯
 柴生田 稔
 尾山 篤二郎
 山田 百合子

今朝すでに花びらを解く蓮翹のこんにちの新われになにある②	川浪磐根
今朝のあさ初雪降れる山あらむ既に頻き降りし山より低く⑪	斎藤茂吉
けさの暑さすでに酷しと思ひつつ鳥獣販売店の日蔭にたたずむ② （山）	小宮良太郎
今朝の日の彼の真光もすでにして没らむかたちか低雲のうへ②	鹿兒島壽藏
けさ晴れて空すがしかりきすでにして戦果大洋にさがりみなり①	伊藤嘉夫
今朝も一つ咲きし芙蓉のあざやかさきのふき花は既に散りたる①	大悟法利雄
夏至すでに過ぎたることをおもひいで蔵王の山をふりさけにける （小）	斎藤茂吉
月光のあそびは既になくなりし今にむかしの其のをつちかふ （朝雲）	岡麓
結球をすでに始めし甘藍と眼にとめて思ふ春のちかきを③	大岡博
月光に濡れて登れば尾根越しの向うは既に黎明の空①	大悟法利雄
月光の中に坐りて土用太郎のけふの暴暑はすでに忘るる⑩	吉植庄亮
血圧のたかき血すぢに生きのこる人もすでにして中風に臥す⑩	木俣修
決断わるくピラ読みて我が歩む時既に哀訴の声あとになる②	高安国世
け並べて雨寒むけれどすもの花すでにふふみて咲く日ちかしも①	神原克重
氣にふかき蝶のむつみや誰知らぬ墓うらの照りのすでに久しき	北原白秋
今日すでに昨日にあらぬ幼子のもの懐しつところ育つを②	隅田葉吉
けふの終りの夕焼けにひとりむかひ立つ今手もすでにいくばくもなし	横田専一
② 今日一つ築きてふえたる新墓の上にもすでに杉雪おつ⑤	四賀光子
幻影に過ぎずといふかまぼろしに見えるものはすでに実存⑦	四賀光子
限界はすでに見えつつ齢われ朝芝の露ふみてすがしむ③	村野次郎
限界になりしと思ひ哀しかり和裁仕事も五十むかえて	高田勝江

原始的産業とおもふ採蔵の作業視つめつつすでに三十余年①	荒木暢夫
原爆がすでに持込まれるむことも気付かぬふりして我等ゐるのみ⑤	西田嵐翠
顕微鏡下にわが見る便は既にして心統べしむる世界を持てる①	芦田高子
コーカサスの山にはすでに吹雪すと傳へ来しより幾日か経けむ②	柴生田稔
興安のやまより兵に召されゆき友しらせなくすでに幾日か （支那事変後）	山本友一
工員の実収入と半生をすでにささげたる我とに差のなき①	大場寅郎
公園のかなしみよ、君の嫁ぎてより、すでに七月来しこともなし①	石川啄木
高原は秋づくはやし青桐の実はすでに熟れてこぼれけるかも①	中村美穂
孝行のをしへをぞおもふ不惑の年をすでにむかへて世に立つきみをこ	三井甲之
とほぎて①	
麴米すでに取り終へて仕込蔵へ運ぶ蒸米の行き来のいきれ （多磨一・新萬葉）	芥子沢新之介
抗争のそのおほよそもすでにして遠き思ひにわれは聞くのみ②	山崎一郎
候鳥もすでにわたりをへむころなれば心をこめて守らむ日あり⑤	生方たつゑ
紅梅は今年は花のすくなくすでに散りなむ風情にあはれ	小泉茅三
工房に注連はめぐらし水垢離に身を潔めつつすでに幾日ぞ （多磨三）	横地信輔
興亡のすでに查けし城山の水場に蝌蚪はくろぐろと寄る③	佐野四郎
向山の木の際わづかに明りさし朝夕立はすでに音なし	多野久麻
荒寥と瓦礫みだるる焼跡も冬すでに八つ手の花を咲かしむ⑥	木俣修
声すでに絶えしと思ふこほろぎの腹ふくらかに石の下にゐる②	谷鼎
こゑたてて書の歌よむわが癖をあたりそこの既に知れりや①	真島武
蟋蟀はすでに鳴きたり暑き暑き夏とおもひて山くだりしに⑩	斎藤茂吉
木蔭には雪の残れる寺庭に紅梅のはなすでにふふみぬ⑤	岡野直七郎
五月にも既に秋をば人に吹く日の御埼かな松風と浪⑬	與謝野寛

黄金蟲庭に抛ち背をかへす既にやさしき妻の面ざし①

千代国一

風を聴きておもふはすでに亡き友啄木がありし日のこと②

吉井勇

漕がれ来てすでに一里を水ひろみ君が山するな見ゆるかな③

尾上柴舟

国民登録の齡をすでに越えし身と時に悔しき思ひなしとせず④

大場寅郎

苔の色も冬のさませりひとところすでに雲におほはるるありて⑤

松井如流

午後五時をすでにすぎつつ日の光は雲の下より射るごとくさす⑥

鹿兒島壽藏

午後三時すぎつつすでに霧がかり巷のひびきもおもしろけれ⑦

鹿兒島壽藏

ここに居てすでに時ひさし四方の山巒をふかめて昏れ入らむとす⑧

林宣男

葉集六

ここにこの海うしはちつところがりれわれならばすでに死にてあるべし⑨

土岐善麿

ここにして既に惑へと云ふ如し御寺の山のしら雪の道⑩

近江満子

こゝにして水緩みつつ大河の相はすでに見えにけるかも⑪

安田勝子

午後二時といふにすでにしかたぶきて梅の粗枝に寒き陽の色⑫

小宮良太郎

ここはすでに杭州湾か雨ある海いちめんにならぶ軍用船⑬

中山隆祐

こころ急ぐ思ひに解けば茄子の苗すでに萎えては下葉を垂るる⑭

大岡博

こころ疎くありけるほどに巷にはすでに桜のはな咲きにけり⑮

塚田菁紀

こころきめてすでにかあらむ天雲のとほきしらぬひ筑紫の国に⑯

鹿兒島壽藏

心こめし西洋の学の系統もすでにもの憂し秋の夜ごろは

斎藤茂吉

こころすでに姉となりたる吾子のまみ鱗くうるみて胎児の上いふ⑰

五島美代子

心すでにあきらめに人らむ前夜にあり捨ててかかれといふ声をきく⑱

館山一子

心すでに死していくとせ灰の如冷たき性をあやしますや⑲

井関照子

心すでに定りにけり一日一日晴れうつくしき秋を愛しむ⑳

神原克重

心迷ひしづまりけるが今にして時既に遅し老いにけるかな①

岡麓

心優しき娘が事ごとにいらだつを目守りてゐたりすでに久しく②

岩上とわ子

心ややときめきて入る人らずすでにしづかに並ぶ表西の間③

谷鼎

快き競ひ心は既に湧くわがよき友はかへり来にけり④

高安国世

快く働かむと来し朝の室に掛りし電話にすでに怒れり⑤

吉田正俊

心弱きそのときどきのことば皆すでに未来に裁かれてあり⑥

近藤芳美

腰すでにまがりし父とこの里にひと夜宿りしことしおもほゆ⑦

斎藤茂吉

小蒸気のここ過ぎて既に遥なり遠くクレーン雪にけぶれる⑧

高橋希人

梢高き楓葉もれてさせる日の光はすでに秋のおとづれ⑨

堀内通孝

来ずなりし鍊に夢を托す人すでになからむ秋風到る⑩

井出一太郎

午前二時のあら谷みちをくだりゆく我の心はすでにいきほふ⑪

金子信三郎

午前の太陽行く背にすでに暖し午後ひとりせむ仕事もくろむ⑫

谷鼎

午前四時すでににめざめて世の中のならゆくさまを思ひつつをり⑬

安田青風

午前四時すでに過ぎたるころほひに寝ぐるしかりし夜は明けむとす⑭

斎藤茂吉

午前より既に疲るるこの身をもいたはらむとして独し居たり⑮

斎藤茂吉

骨壺の前どころぶすうつし身を吹く秋風邪はすでに寒けれ⑯

吉野秀雄

こでまりの細かき芽ぶき目にとめて仰ぐ入り日はすでに大きく⑰

谷鼎

今年すでに雪ふりしとていんだうのいのちをつくす紺青の花⑱

小宮良太郎

ことすでに明らかなれやこの夜をわが妹は誘はれにけり⑲

高田浪吉

事すでに今は終わりにあるらむと燃ゆる彼方に挙手の礼する⑳

佐藤完一

ことのさま霧立ち霧のへだて居るそれにはあらず既に君なし①

與謝野晶子

ことのさま霧立ち霧のへだて居るそれにはあらず既に君なし②

與謝野晶子

言葉がどこかへ拭はれてしまふ、ほっとするとき児がすでにある③

清水信

事疾くすでに建前終へけりと読書子の子が貧しき小家②	窪田空穂
こども一人あそべる丘をくだりきて草の穂は既に見わがちがたし④	小暮政次
子供らは既に忘れし遠富士を猶見ゆるとぞ母の見ています （新萬葉集二）	飯屋安吉
子供等は何して遊ぶ出て来しその日は既に吹雪なりしが⑩	尾山篤二郎
子とわれとすでに幾つもの波を越えあるときは世に馴れし思ひする	片山広子
来ぬ人をまつてふすでに第一歩ゆづりそめたるわれにはありしか①	田波御白
この朝け乳やる吾子の既に亡く草にしやがみて乳をしほりつ	清水恒子
この朝の曇やすでにつゆどきにつづかむか竹の葉に光るつゆ③	村田利明
この朝のすでに冷き草もみち夥多の露をみれば爽けし①	常見千香夫
この家の主もすでに亡し門ふかく閉す青葉の夕寒き雨②	中河幹子
この家に諸買ひに来てこつじきのごとく追はれきすでに幾とせ①	鷗木保
この一事遂げむと一夏こもりきて眼をやればすでに萩も散り果つ③	大岡博
この駅に出征の友送れるはすでに七人後いくたびぞ （支那事變後）	池川純平
この丘の木の芽はいまだあかるけれ船も巷もすでにともれり	中島哀浪
この丘の松に倚る雷の傷痕もすでに繋りてしづかに高し	坪野哲久
この男啞にはあらず否も諾も云ふべき時は既におくれき⑨	與謝野寛
このおもわずでにこの世のものならずと思ふあひだもわれはまもりつ	島木赤彦
③	
子の面輪すでに忘れておぼつかなただ戒名をこの日つぶやく② （角川文庫）	吉野秀雄
この峽に堰堤をつくりて山のみづ湛へむことを既にはじめぬ⑩	斎藤茂吉
この国に冬早くして浅間嶺のいただきすでに雪を被ける③	杉浦翠子
この国の冬日あたたかし然れどもかの山かげはすでにかけれり	古泉千樫
この事は昔もありきすでに新たなる世界の中のおろかなる危機⑦	土岐善麿

この坂を行かで幾年その日見ぬ木おろし軌道すでに古りたり⑫	尾上柴舟
この坂をすでに遙かにひとり来て今見てをるは山あぢさゐの花 （新萬葉集八）	三苫守西
此の女囚に妖しき体臭を感じるは既に午過ぎて饑じき故にやあらむ①	加納小郭家
この空の湿りにあかる日の在処梢はすでに紅み張りたる	北原白秋
この空をすでに黄河の以南までわたらふ雁は渡りつらむか⑧	斎藤茂吉
この谿やすでに馬酔木は数の果のかぐろに染みて房に垂りけり	北原白秋
この童子みなし児といへどふたりの祖父ふたりの祖母がすでにあるにあらずや⑨	斎藤茂吉
この友もすでに老いつつ若き日の面ざしの上に白き髪おく②	村野次郎
この夏は金蓮などの匍ふ土にすでに虫鳴くかなしきものや （夏より秋へ）	與謝野晶子
この庭に椿花咲き頬白の来鳴かも春はすでにちかしも①	小泉茅三
この沼にあつまる雁は午前九時ごろすでに四五百となりて飛びたり①	山口茂吉
このねぬる朝の郷わのあかるかり人々すでに働くらしも	古泉千樫
この日よりいのちのはてに及ぶべき恋と思ひき既に死にけん①①	與謝野晶子
この街に君なほ生きてありと聞くすでに過ぎたる月日は長く （朝日短歌二）	佐藤琢磨
この店に母も屢々花買ひきあるじは老けて母すでになし⑥	岡野直七郎
この道もすでに来慣れつ遠野らにふむむ縁を今日見つ来ぬ①	高安国世
この山に棲む僧もすでにゐずなりてあはれ幾世の仏地すたれぬ③	中沢庭柯
この山にわたただ一人来しと云ふことさへすでに悲しきものを⑩	吉井勇
この山の静けさいつ破るらむ獵夫も勢子もすでにひそみぬ①	穂積忠
この妖艶な紫陽花がすでに結核菌に侵されきゐた。⑤	矢代東村
この夜ジープ巡邏し来りひびき立つ既にひそけしと思ふ赤坂③	香川進
この夜も更けつつすでに午前二時月下美人の花咲きおごる①	鹿兒島やすは